

新カリキュラム 生活行動シリーズ6「生まれること」の 授業展開と今後の課題

林 里沙子*・石丸 舞*・森田婦美子*

I. はじめに

2020年、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令の公布（文部科学省初等中等教育局長他，2020）を受け、京都看護大学においても、2022年度より新カリキュラムを導入している（井上他，2023）。本学の新カリキュラムは、ローパー・ローガン・ティアニーによる生活行動看護モデル（Holland et al., 2003 川島訳 2006）における12の「生活行動」をコンセプトとし、人間と生活行動、生活行動逸脱看護、生活行動看護演習の科目について、シリーズ1～7まで連続的に展開する、横断学的学修編成を取り入れている（鯨坂，2023；井上他，2023；中森，2023）。

本稿では、「生まれること、生命を育むこと」に関連する科目である、人間と生活行動6、生活行動逸脱看護6、生活行動看護演習6（以下、本科目群を生活行動シリーズ6と表記）の授業展開と今後の課題について報告する。

II. 授業概要

授業を構成する当たり、ローパー・ローガン・ティアニーのモデルにおいては、「生まれること、生命を育むこと」に合致する生活行動は示されていない。12の生活行動の一つに、「セクシャリティ

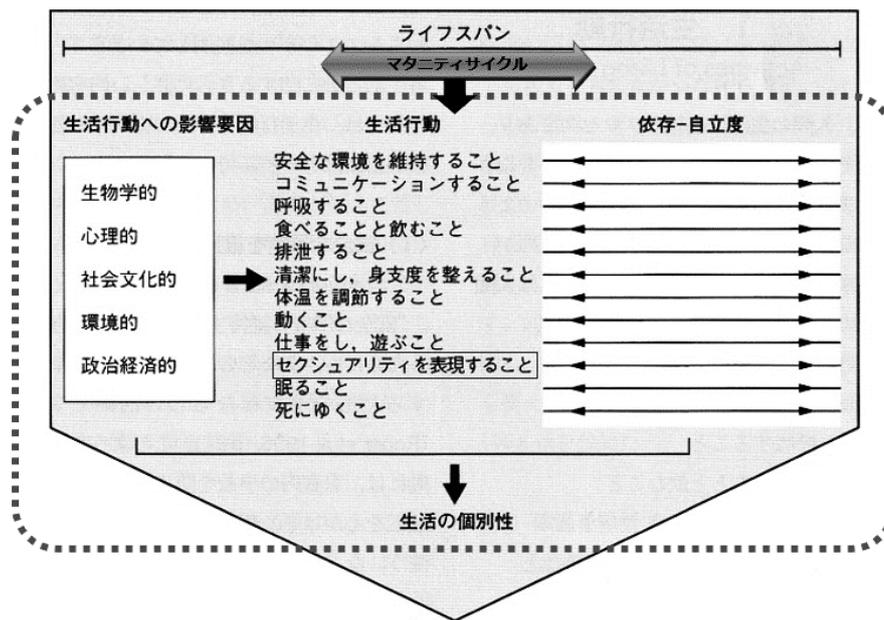
を表現すること」が示されているが、生命の誕生というダイナミックで神秘的なプロセスについて、子どもと子どもを産み育てる親や家族を一体とした視点でとらえ、看護につなげる本シリーズの学修内容とは完全に一致しない。そこで、ローパー・ローガン・ティアニーによる生活行動看護モデルと生活行動シリーズ6の学修内容との関連を図1のように位置づけた。はじめに「生まれること、生命を育むこと」と関連の強い生活行動である、「セクシャリティを表現すること」として、ライフサイクル各期の性と生殖に関連する生活行動について学修し、その上でマタニティサイクル（妊娠期、分娩期、産褥期、新生児期）に焦点を当て、12の生活行動と看護について包括的に学修するような構成とした。生活行動シリーズ6の各科目の概要を表1に示す。なお、マタニティサイクルにおける看護では、マタニティサイクルとライフサイクルの連続性のなかで、その人自身のライフサイクルにおける健康と、世代を越えて次世代のライフサイクルの健康を考える必要があることから（大平，2022）、生活行動シリーズ6では、ライフスパンという用語ではなく、次世代への連続性をも含むライフサイクルという用語を用いた。

III. 授業展開の実際

1. 各科目の学修内容と順序性

生活行動シリーズ6の開講時期は、第7ターム（第2学年の10月～11月）であり、この期間中に

*京都看護大学



生活モデル (Holland et al., 2003 川島訳 2006, p.3) をもとに作成

図1. ローパー・ローガン・ティアニーによる生活行動看護モデルと本シリーズの学修内容との関連

表1. 生活行動シリーズ6の科目概要

科目名 (単位数・授業時間)	科目概要
人間と生活行動6 (1単位・15時間)	人間の生活行動における「生まれること、生命を育むこと」について、ライフサイクル別に、5つの影響要因（生物学的要因、心理的要因、社会文化的要因、環境的要因、政治経済的要因）および生活の個性の視点から学修する。
生活行動逸脱看護6 (2単位・30時間)	人間の生活行動における「生まれること、生命を育むこと」に関する逸脱状態について学修する。また、逸脱の有無に関わらず対象者が持っている強みを活かして、今ある良い状態よりもさらに高いレベルの生活機能を獲得できるような支援について、ライフサイクル別に、5つの影響要因（生物学的要因、心理的要因、社会文化的要因、環境的要因、政治経済的要因）、依存-自立度、生活の個性、ウェルネスの視点から学修する。
生活行動看護演習6 (2単位・30時間)	人間の生活行動における「生まれること、生命を育むこと」に関して、マタニティサイクル各期の対象者の状態を適切に観察、アセスメントし、対象者が持っている強みを活かして、今ある良い状態よりもさらに高いレベルの生活機能を獲得することを目的とした看護実践方法について学修する。

本シリーズ3科目の学修内容の順序性を検討し、時間割を設計した。前半では、人間と生活行動6の科目で、人間の性と生殖に関する概論および男性・女性の生殖器の形態と機能について学修し、生活行動逸脱看護6の科目で、女性のライフサイ

クル各期の健康課題と看護について学修した。後半では、マタニティサイクルに焦点を当て、人間と生活行動6の科目では、マタニティサイクル各期の生理的変化、生活行動逸脱看護6の科目では、マタニティサイクル各期の正常経過における看護

および逸脱状態における看護、生活行動看護演習6の科目では、マタニティサイクル各期に必要な看護技術演習およびアセスメントを学修した。

各科目の順序性として、特に後半のマタニティサイクル各期の学修時には、妊娠期について一連の学修を行った後に分娩期の学修に入るといったように、可能な限りマタニティサイクルの時期ごとに、生理的変化、看護、看護技術演習を学修し、次のサイクルの学修に移行するという時間割配置とした。さらに、マタニティサイクルにおける看護を考える際には、妊娠期の状態が分娩期に関連し、さらにそれらは産褥期、新生児期にも関連するといったように連続的な視点が欠かせないため、次のサイクルの学修を行う際にも、常にこれまでの経過をふまえて考察していくことの重要性を伝えるようにした。

2. 実際の授業展開

実際の授業では、事前課題として、各授業の学修内容に関連した選択式の問題を出題し、適宜ワークシートの作成を提示した。問題の出題および回答は本学で使用しているMicrosoft Teamsのシステムを利用し、次回の授業に向けて質問をできるように設定した。事前課題の回答の正誤は評価対象とせず、次回の授業に向けた学修の方向性の提示と、問題回答を通じた自己学修を目的とした。また、ワークシートの作成は、解剖生理学や技術演習の基本的な知識など、事前に予習することで授業の理解が深まると考えられる項目に限定して提示した。

人間と生活行動6、生活行動逸脱看護6の授業では、主にPowerPoint、モデル等の教材、動画視聴を用いた講義を行い、途中でグループワークを取り入れながら授業を行った。マタニティサイクル各期の看護については、初産婦、経陰分娩の1事例をカルテ形式で提示し、妊娠期から産褥期、新生児期まで各学修項目に応じて事例の経過を確認することで、対象理解を深め、実際の看護実践をイメージしやすいよう工夫した。また、グルー

プワークは、出生前診断に関するディスカッションなど、生命倫理について考察を深めることを目的としたワーク、分娩期の胎児回旋について胎児人形を使用して学生同士で教え合うなど、学修内容の理解を深めることを目的としたワーク、事例の一場面を取り上げ、必要な看護を検討することを目的としたワークなどを実施した。加えて、各学修項目の最後には、知識確認として事前課題問題の解答および解説を行い、学生の回答状況に合わせて各選択肢の説明も含めてフィードバックを行った。

生活行動看護演習6の授業では、主にマタニティサイクル各期に必要な観察および看護の技術演習を行った。事前にテキストや動画に基づきワークシートの作成に取り組んでいることを前提とし、適宜教員がデモンストレーションを行い、学生同士で検討しながら援助を実践できるように展開した。また、技術演習に加えて、事例を用いて、対象者が持っている強みを活かして、今ある状態よりもさらに高いレベルを目指すウェルネスの視点をういたアセスメント、看護計画立案について、講義およびグループワークを通して学修した。

IV. 教育実践の評価

生活行動シリーズ6の全授業終了後に、Webポータルシステムを用いた無記名のアンケートを実施し、受講した学生97名中91名より回答を得た(回答率93.8%)。なお、アンケートへの回答は任意であり、無記名であるため回答の有無が特定されることはなく、評価には一切影響しないこと、匿名性を保った上で結果を公表することを口頭および依頼文で説明した。

1. 学修への意欲

生活行動シリーズ6への学修意欲について、32名(35.2%)がとても意欲的に取り組めた、49名(53.8%)が意欲的に取り組めたと回答した(図2)。

意欲的に取り組めた理由として、妊娠や出産への興味など、学修内容への関心の高さが多数挙げられていた。さらに授業を通して、生命が誕生していく過程への興味が深まったという声が挙げられており、学生が「生まれること、生命を育むこと」に関心を持ち、学びを深められていたと推察される。

また、事前課題での疑問を授業で補えたなど、事前課題を通して、学生が主体的に学修を進めることができたと考えられる。また、積極的にグループワークに取り組めたという声も挙げられており、学生同士で意見交換し学びを共有することで、学修意欲に繋がっていたと考えられる。加えて、アセスメントや看護計画を行うことで、今まで学習した内容をより深く理解できたなど、アセスメントや看護計画立案の実践を通して、学修した知識をどのように対象理解や看護に繋げていくか考えることで学びが深まり、学修意欲が高まったと推察される。

2. 学修方法

生活行動シリーズ6で行った各学修方法について、学修しやすかったと回答した学生の割合を図3に示す。予習では、事前課題問題への取り組みが学修しやすかったと回答した学生が68名(74.7%)と最も多く、講義における事前問題の解

答解説の聴講も55名(60.4%)と多かった。予習として問題回答に取り組み、わからなかったことを調べた上で授業を受け、授業内で解説を聞き理解を深めるといった反転授業によって、一定の学修効果が得られていたと考える。また、解剖生理学等のワークシート作成についても58名(63.7%)が学修しやすかったと回答しており、ワークシートを作成することで解剖生理学など基本的な知識の定着に役立てることができていたと考えられる。また、技術演習は54名(59.3%)が学修しやすかったと回答しており、予習をふまえた上で、教員がモデルとなってデモンストレーションを行うことで、看護実践のイメージが沸き、学生自らの技術演習への取り組みに繋がったと考えられる。また、モデル人形等の教材用いた講義や、動画視聴を用いた講義により、分娩機転について理解できた、妊産婦の心理的变化に対してイメージが湧いたという意見が挙げられ、資料提示や口頭のみではイメージすることが難しい内容についても、教材を工夫することで理解が深まったと考えられる。

一方、技術演習のワークシートの作成は28名(30.8%)と、学修しやすいと回答した学生の割合が少なかった。看護実践を行う上で、事前に根拠や留意点を理解し技術演習に取り組む必要があるためワークシートの作成を提示したが、ワーク

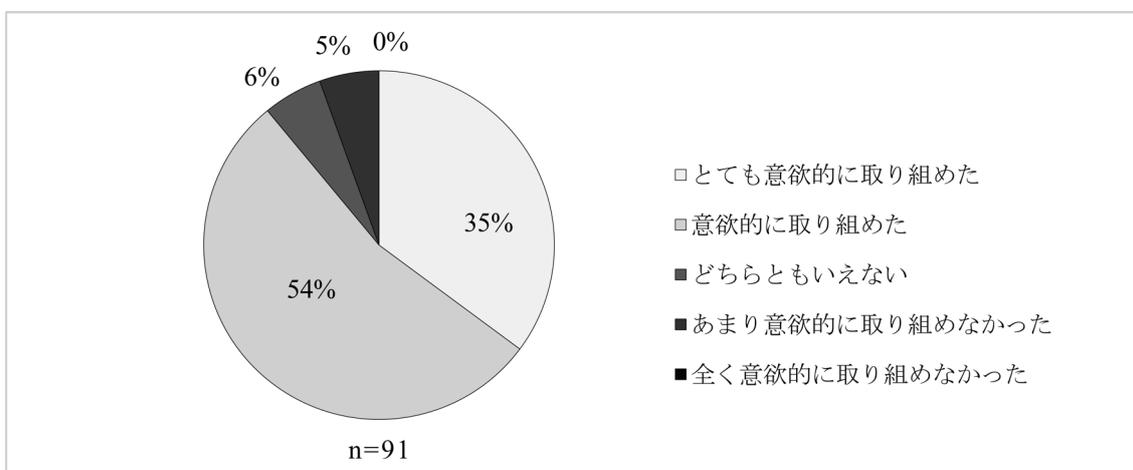


図2. 生活行動シリーズ6への学修意欲

シート作成の目的を理解できるよう十分な説明を行うこと、技術演習を終えた後に作成したワークシートと照らし合わせてフィードバックを行うことが課題に挙げられる。また、前述のようにグループワークを行うことで学修意欲に繋がっていたと考えられるが、今回の授業ではグループワークの時間を十分確保することができなかつたため、グループワークの内容や時間配分を検討していくことが今後の課題である。

3. 学び

生活行動シリーズ6で得られた学びについて自由記述で回答を得た。学びの内容を整理すると、生命誕生の仕組みを理解し奇跡を実感したという内容や、動画視聴を通して出産への理解が深まり看護について考えることができたといった内容が多数挙げられていた。また、生物学的要因だけでなく、マタニティサイクルにおける心理的な変化や母子の愛着形成、退院後の生活を見据えたアセスメントといった、心理的要因、環境的要因につ

いても学びが挙げられており、全人的な対象理解への学びに繋がっていたと考えられる。また、ウェルネスの視点によるアセスメントや看護についても学びとして挙げられており、マタニティサイクルの特性に応じたアセスメントへの理解が深まったと考えられる。さらに、演習では安全安楽への留意点や声掛けの工夫など、実際の看護実践に向けた学びについても多数挙げられていた。

V. 今後の課題

生活行動シリーズ6では、「生まれること、生命を育むこと」について、人間を深く理解し看護へと繋げていけるような学修を目指し授業を行った。アンケート結果より、意欲的に取り組めた学生が多く、学びからも一定の教育効果があったと推察される。

一方、学生から挙げられた授業への改善点として、授業内容の多さや、シリーズ内の科目区分のわかりにくさなどが挙げられた。生活行動シリー

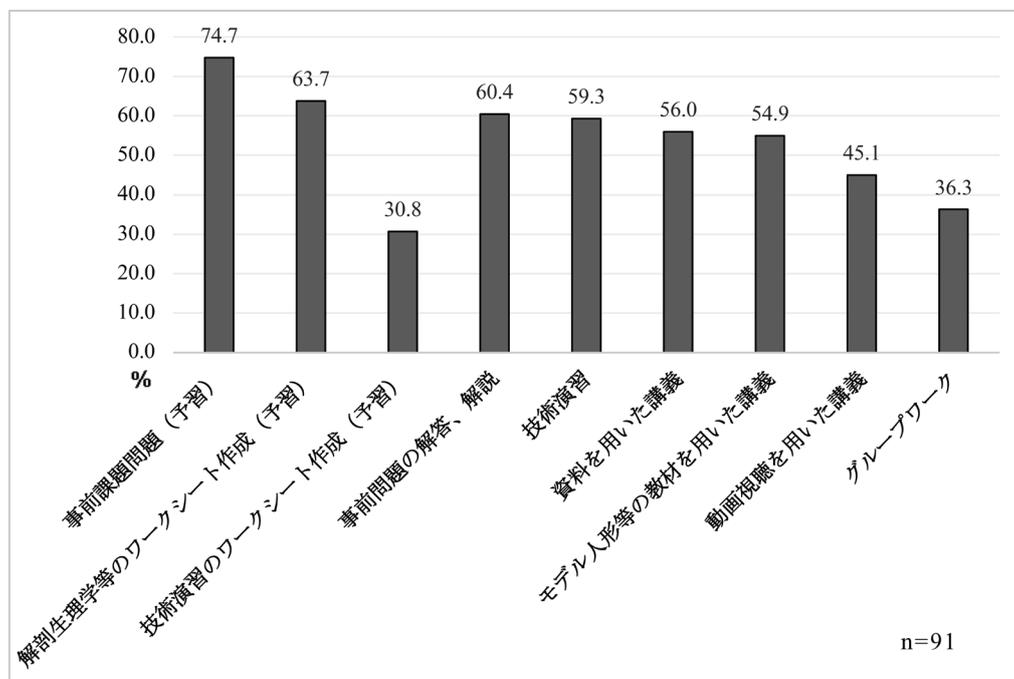


図3. 生活行動シリーズ6で行った学修方法 (学修しやすかったと回答した学生の割合、多肢選択)

ズ6では、看護基礎教育における母性看護学の学修内容を網羅し、今後の臨地実習や看護師国家試験受験を見据えて授業を行う必要があるが、限られた時間内で効果的に学生の学びに繋がるよう、重要な点に的を絞って授業を展開していくことが今後の課題である。また、シリーズ内では各科目に連続性があるため切り離すことはできないが、各科目の学修目標や学修内容について理解が深まるよう、科目概要の説明を十分に行い、資料提示の工夫をしていくことも課題である。

また、本稿では学生の主観に基づくアンケートをもとに教育実践の評価を行ったが、今後は客観的な評価も交えて、教育実践の評価および改善を継続していくことが課題である。

大平光子. (2022). マタニティサイクルとライフサイクルの連続性. 大平光子, 井上尚美, 大月恵理子他編, 看護テキストNiCE母性看護学Ⅱ マタニティサイクル改訂第3版母と子そして家族へのよりよい看護実践. pp. 2-4, 東京: 南江堂.

引用文献

- 鯉坂由紀. (2023). 新カリキュラム 生活行動2「食べることと飲むこと」の授業展開と今後の課題. 京都看護, 7, 65-70.
- Holland, K., Jenkins, J., Solomon, J., et al. 編(2003)／川島みどり訳(2006). ローパー・ローガン・ティアニーによる生活行動看護モデルの展開. 東京: エルゼビアジャパン.
- 井上深幸, 田口豊恵, 中島優子他. (2023). 新カリキュラム施行から1年看護基礎教育の今を探る (Part 3)新年度から新たに取り組む科目の展望 生命と生活をつなぐ看護モデルへの転換. 看護展望, 48(4), 379-385.
- 文部科学省初等中等教育局長, 文部科学省高等教育局長, 厚生労働省医政局長. (2020). 保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令の公布について(通知). https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tc5425&dataType=1&pageNo=1. (閲覧日: 2024年1月3日)
- 中森美季. (2023). 新カリキュラム 人間と生活行動3「生活を創り出すこと」の授業展開と今後の課題. 京都看護, 7, 77-81.